

---

# **世界を壊す救世主 番外編**

結木しぐさ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界を壊す救世主 番外編

### 【Zマーク】

Z6711P

### 【作者名】

結木じぐわ

### 【あらすじ】

世界を壊す救世主番外編です。“闇”と呼ばれる黒き獣たちから世界を守り救うを“天子”として召還されたわたし。だけどこの世界を救おうなんてこれっぽっちも思わない。「こんな世界わたしがぶち壊してやる」異世界トリップファンタジー。（世界を壊す救世主よつ）

## 登場人物紹介

【世界を壊す救世主】本編の登場人物紹介です。

ながさわかのん  
長沢花音

性別：女

容姿：ダークブラウンの髪、黒の瞳

備考：本作主人公。異世界より世界を救う“天子”として召還される。

### 【アデウール国】

アゼリ・ディア・アデウール

性別：男

容姿：銀髪、薄い青の瞳

備考：アデウール国的第一王子。

せい  
聖・フワン・フェジー・リード

性別：男

容姿：金髪、深い青の瞳

備考：神官長。年齢は40過ぎくらい。

レヴオラ・シアード

性別：男

容姿：赤茶の髪、飴色の瞳

備考：王都騎士団2番隊隊長。後に花音の専属護衛となる。

セハン・ルファシー

性別：男

容姿：紫がかつた銀髪、銀の瞳

備考：宫廷医師。見た目が女性的。

テルタツテ・ケサイム

性別：男

容姿：黒髪、赤と紫のオッドアイ

備考：五大魔術師2階級。最年少で王宮魔術師となつた天才美少年。花音の専属護衛。

## 【闇】

ナナリ

性別：女

容姿：黒髪に黒の瞳

備考：人魚の姿をした闇。偉い立場にいて力も強い。

あの方

性別：？

容姿：？

備考：？

## フジィ様のお名前（前書き）

シリアルではありますん、コメティよりです。  
本編総無視となつております。

- ・本編イメージを崩したくない方
- ・世界を壊す救世主をお読みでない方
- ・よく分けの分からない話が嫌い方
- ・その他いろいろ不快に思うところがある方

上記に当てはまる人は読まないようお願いします。

## フュージー様のお名前

それはレヴァオ「！」と出合った数日後……

「」のボロ部屋で穏やかな日々を過ぐしている時だった。たまたまセハンが遊びに来たとき、わたしはフッとそのことが頭をよぎったのだ。

「ねえ、セハンさん」

「ん、なんですか？」

わたしの前の席に座るセハンはちゅうっと首をかしげた。男性にしては長いその髪がサラリと肩を流れて思わず見とれる。

ついつい自分の痛んだダークブラウンの髪を見てため息をつきたくなつた。

「なんなんですか？」

「ああ……いえ。フュージーさんの名前ってなんだかすくなく長つたらしかつたですよね？あのクソおつ……いえ王子様よりも長かつた気がするんですけど？」

わたしが本名を名乗つたときにフュージーが名乗ってくれた名前を思い出そうとするが、あやふやでいまいち出てこない。さすがのわたくしだつてあんなに長い名前を覚えるのは無理だ。

「聖・フワーン・フュージー・リード様、ですよ」

「そんな名前でしたね。あれってなんであんなに長い名前なんですか？」

聞けば、セハンは丁寧に答えてくれた。

「まず、最初の“聖”は代々神官長になる人に与えられる名前ですね、神官の人間に言わせれば聖を名乗ることはかなりの憧れらしいよ」

「なるほど」

「んで次に、フワソツてのはフェジー様の名前で……」

「え？……フェジーが名前なんじゃないんですか？」

どの人もフェジー様、フェジー様って呼ぶからフェジーが名前なのだろうと当たり前のようつに思つていたが違つらしい。

「フェジーつていうのは簡単に言えばあだ名だね。神官になる人間はその時の神官長から別名をいただくんだよ。フェジー様だけじゃなくて神官ならみんな別名をもつていてそれで呼ばれるほうが多いね。むしろ本名で呼ばれる人間の方が少ない」

「へえ……そなんですか」

わたしは感心しながら頷く。

「最後にリードつてのは彼の姓。ちなみにリード家は代々神官をやっている偉い家なんだよ。確かフェジー様の祖父が前回の神官長だつたかな」

なるほどね。

当たり前だがちゃんと全部に意味があつたようだ。

それにしてあんなに長つたらしい名前だと名乗るのも大変なんじやないだろうか？

それに……

「セハンさん」

「なんだい？」

「つまらないことを言つてもこいでしょうか？」

そういうえばセハンは少々困惑した顔をしながらも頷いてくれた。

「フュージー様の名前ひフワーンなんですよね？」

「……そうだよ？」

はつきり言つてわたしが今から言つことはかなり失礼なことだが、思つてしまつたんだからしようがない。

「フュージーさんひ、フワーンひこつよりガチンつて感じじゅないですか？」

体系的にも内面的にも全然フワフワしてないし、絶対ガチンつて名前のほうが合つていると思ひ。

「ふうう」と頷くわたしを見て、セハンは苦く笑みを浮かべていた。

おしまい

## フジ様のお名前（後書き）

お気に入り登録100人突破記念に書いたお礼小話です。  
旧ブログ閉鎖のためこちらに移動させました。

本編イメージ壊しまくってごめんなさい（汗）  
こういうの好きなんです。

## セバンの人気度（前書き）

シリアルではありますん、コメティよりです。  
本編総無視となつております。

- ・本編イメージを崩したくない方
- ・世界を壊す救世主をお読みでない方
- ・よく分けの分からない話が嫌い方
- ・その他いろいろ不快に思うところがある方

上記に当てはまる人は読まないようお願いします。

## セバンの人気度

それはとある日の「」と……

「おいつ見りよ」これ

あのボロ部屋にこそのに飽きて廊下をうろちゅうとしていたときのことだ。

フツと前方にものすゞくはしゃいだ声をだす衛兵を見つけてわたしは首をかしげた。

手に何か持っているようつである。

「うわあ……やばいな」

「何と可憐な……」

「こいつ見ても可愛いですよね」

衛兵たちはソレを見て口々に感想を述べていく。  
その類はホンの少し赤くなつていて見えた。

はつきり言つてしまえば

筋肉ムキムキで、腰には剣をさしている大の男がそんなことをしても可愛くもなんともない。

「いつたいどこから手に入れたんだよその『写真』

「それは秘密だって」

「どうやら彼らが見てるのは『写真』のようだ

それが分かると次に『氣になぬ』ことが出来る。

いつたい誰が『氣になら』のだから？

あつと誰だつてやう思ひに違ひない。あんな風に『氣』ひとつ見ていいのが誰なのか、気になつてしまふがな。

だからと書つて、わたしはこの廻敷では避けられる存在だし見せてと言つても見せてもう見えないだろ？

その前に逃げられてしまつのがおちだ。

しばらく考えたあと後ろを通りすぎるとさきにナリコと見てみよう作戦をとることにした。

衛兵たちが『眞に夢中』のようだしあつとわたしが後ろを通りながら廊下を歩き出す。

よしつつ…と『眞』を入れたわたしは、なるべく自然な感じを装いながら廊下を歩き出す。  
そしてつづりで衛兵たちの後ろあたりに来たとき、その隙間からチラシとその『眞』を見て、思わず足の動きを止めてしまった。

「……え」

無意識のつりに出てしまつた声にハッとしてわたしは急いでその場から離れる。

今見たのは……

いや思つたような写真ではなかつたが……そつ、悪い写真ではなかつたのだが……

「いやあ、やつぱりセハン殿は男装しているときが一番だ」

うつとりと躊躇かれたその言葉を背にわたしは一度も振り返らずに歩き続けた。

写真に写つていたのはセハンだったが、今よりも若い頃だったように思える。なによりも今の女性的な雰囲気が全くなくて、まさに男という感じだった。

髪も短かつたし、なぜか剣を持っていたし、ワイルド感たっぷりだったよろしく見える。

不覚にもときめきそうになつたのは秘密だ。

後に聞いた話だが、セハンは男の格好をしていたときにあまりにも男にモテていたらしく、それに嫌気がさして女性的な振る舞いをはじめたところその人気は落ち着いたのだとか。

セハンの女性的な振る舞いの意外な訳を知つたわたしはなんだかセハンも色々大変だと同情したのだった。

おしまい

## セバンの人気度（後書き）

お気に入り登録300人突破記念のお礼小話です。  
旧ブログ閉鎖のため移動させました。

無心で書いたので……なんか酷いですね(汗)

## Merry X-mas? (前書き)

本編総無視。

あえて本編と交えるなら、レヴォラが敬語になる前の話です

クリスマス特別編。

## Merry X'mas?

とある日のこと  
自分の部屋から出たわたしはいつもと少し違う光景に首をかしげた。

王宮内で使用人が忙しそうにしているのはいつものことだが、今日はいつも以上に人が多いしその顔に焦りがある。

「何があるんですか？」

傍らにいるレヴォラにそう聞くと、彼はああと頷いた。

「今日と明日、聖夜祭があるんだ」

「聖夜祭？」

聖夜……といえば連想するのはクリスマスだ。それと似た類のものだろうか？とわたしは考える。

「どんなことするんですか？」

「そうだな……。アデウール国で聖夜祭は、マイナーな行事だから、これといって何をするか決まっているわけではないのだが、主に神官の人間が活動している。祈を捧げたり、貴族や王族の子供に話をしてやったり、あとは神官長が神に踊りを捧げたり……」

ん?

神官長……が踊り?

「あの、神官長ってフェジーさんですよね?」

「そうだが?」

「フェジーさん、が踊るんですか。あのムキムキで強面のフェジーさんが?」

「そうだ」

……想像できない、いやつもつしてしまったが。

フェジーの踊り……見たいような、見たくないような……複雑な心境だ。

「……フェジー様の踊りは力強く、人気も高いと聞いている。お前いったいどんな想像をしているんだ」

天使の衣装に、可愛いらしいう振り付けの踊りを想像しているなんて、言えない……。

「はあ……それで、お前の世界はないのか?こういった行事は「えつ、ああ……ありますよ。クリスマスといって、サンタクロースっていうおじさんが子供たちにプレゼントくれたりするんです」

少々説明を要約しそうした気もするが面倒だったので許してほしい。

「子供たちにプレゼント? そのサン……なんぢゅうはよほび金持ちなんだな。世界にどれだけの子供がいるか……。ん? お前の世界の人口は少ないのか?」

何故だろう?

なんかものすごく可笑しい方向に話がいつているが、今さら実はサンタは……なんて説明するのも大変なので笑つてごまかした。

「えーとそれから、恋人や友達、あと家族……同僚なんかでもプレゼントをあげたりするんですよ。わたしも去年のクリスマスは家族にプレゼントしました」

去年のクリスマス、懐かしい……

もう子供でもないわたしに母がクリスマスプレゼントをくれた。弟がずいぶんと高そうなネックレスをくれた。

家族でプレゼントを交換して、ケーキを食べるだけの1時間にも満たないパーティーだったが、なんとも愛しく温かい日だった。

でもそんな日はもう二度と「なー」のだらつ

今年のクリスマスは……

「恋人や友達、家族に同僚、か。……そうだ！」

レヴォラはわたしの言葉を聞いて何か思ついたよう自分のポケットを弄り始めた。

しばらくするとポケットからなんとも可愛らしい包み紙がでてくる。

「やあ

そう囁ひ渡された可愛らしい包み紙。

見た感じは飴に似てゐるが、異世界の食べ物なのでよく分からない。

「イライラしたときのために甘いものは持ち歩くよ」としているんだ。こんなものでよかつたら……。……えーっとクリスマス? のプレゼントにやる

少し照れたようにそりこつ彼。

荒みかけていた心がふんわりと温かくなつたような気がした。

「……あつがとへ、『じやこ』か

レヴォリューションと似合わなこその可憐にしこ包み紙がす"」へ

温かく感じる。

今年のクリスマスは

## Merry X-mas? (後書き)

何でもありのクリスマス特別編  
あとがきといつ名の言い訳

### レヴォラ編

甘くしてみたつもりです。

本編ではあまり出来ない甘や……でもないですね

レヴォラと主人公を書いてるとつい甘くしたくなります（汗）

さて、

特別編はまだまだ続きます！

とにかく本編無視ですので、イメージ崩された方申し訳ないです

なるべく多くの登場人物とのクリスマスを書きたいと思つてます。

それでは

少しでも多くの方にお付き合いでいただけると嬉しいです。

# Merry X-mas? (前書き)

本編総無視。

クリスマス特別編

## Merry X'mas?

聖夜祭はマイナーな行事といつてもそれはあくまで庶民の間での話。

神官たちにとつては大きな行事であり、王宮内でもそれなりに重視されているようだ。

そのため、実力のあるレヴォラも警備に回された。

一見わたしは無防備状態だが、見えないとこで護衛が守つてくれているらしい。それからテルタツテが守護の魔術をかけてくれているとか、いないとか……

そんなこんなでレヴォラなしでもわたしは安心して王宮内を歩き回れている。

神官たちの行事というだけあって、今日は神官の格好をした人間が多く走り回っていた。

聖夜祭のメインは明日の夜。今日は前夜祭のよんなものらしい。

ちなみにフェジーの祈のダンスも明日だとかで……

「お嬢さん、何一人で笑つてるの?」

思わず口にせかてしまつたわたしにそんな声がかけられた。  
サラリと靡く紫っぽい銀髪が何とも羨ましい。

「いえ、ちょっとと思い出し笑いですよ」

「何？気になるね」

「たいしたことじやありませんから」

そう言つて笑えば、ふうんという顔をされた。  
なんだかすゞく疑われている気がする。

「そういえば、今日つて聖夜祭つていう行事らしいですね。セハ  
ンさんは何かしないんですか？」

「ん？……そうだね、僕はただの医者だから特にね……」

「そうなんですか……」

やつぱり神官たちの行事なんだなあと想つ。

「そうだ。お嬢さんは聖夜祭がどんな行事か知つてる?」  
「えつ……ああ、いえ。神官たちが頑張つている行事だとしか…

…  
「ふうん、そっか」

セハンはそういうとその瞳をスッと細める。  
なんだろう、一瞬クラッときやうになつた。

この色気は一体どこからくるんだろうか？

いつもは女性的なのにフツとした瞬間男性的な色気がでて困る。

そんなことを疑問に思いながら、その瞳の甘さに負けないよう彼  
を睨み返そうとしたその時

わたしの髪に柔らかな感触が触れた……

「…………はっ？」

無意識に自分の髪を押さえながらもびくつしてセハンを見上げ  
る。

見れば彼は可笑しそうに妖美な笑みを浮かべていた。

「なつ、何するんですか！？」

「クククッ、『めん』『めん』……聖夜祭はね、世界の平和を願う  
日なんだ。昔は、世界を救う天子を祝う日でもあつたらしいよ。だ  
から今日と明日の主役はお嬢さん……かもね」

「えつ……」

何それ？

呆然とするわたしを彼はにこやかにいつもの笑みで見つめる。そこに先ほどまでの妖美な雰囲気はない。

セハンは最後にポンポンとわたしの頭をなでると笑いながらその場を去つていった。

その後姿をわたしはただただ見つめることしかできない。

何だつたんだ一体……

セハンの姿が見えなくなつた頃、わたしはソッと空を見上げた。先ほどから、頭を回つている言葉……

“昔は、世界を救う天子を祝つ日でもあつたらしいよ。”

天子を……祝う……祭り、ね

「ふうん

わたしはゆっくりと、微かにセハンの温もりが残る髪を撫でた。

## Merry X-mas? (後書き)

なんでもありのクリスマス特別編  
あとがきという名の言い訳

### セハン編

色氣を出やつーっと思って書いたんですが……  
あれ?なんか色氣ないですね(汗)  
甘くなりすぎず……色氣をだして最後はちょびっとシリアルに  
イメージはそんな感じです、はい  
なんでもアリですから許してください

特別編まだまだ続きます!

# Merry X-mas? (前書き)

本編総無視

主人公性格崩壊?

クリスマス特別編

## Merry X'mas?

一夜明けて、聖夜祭一日目となる今日。わたしはこの世界に来て初めてと言つていいほどの胸の高鳴りを感じていた。

あと数分ほどで始まるのだから仕方がない。

えつ?  
何がつて?

今回の聖夜祭のメインイベント、神官長様が神へと捧げる舞が、だ。

「花音……なんか……いつもと大分様子がちがうけど、大丈夫?」

隣で一緒にフェジーの踊りを見に来たテルタッテが何とも言えない顔をしてこちらを見ていた。

赤と紫の瞳が、スッと細められている。

「え……別にいつもと同じだと思つけど、何か変?」  
「うーん、変と言えば変かな?……何ていうか浮かれてる?」

別に間違つてはいないが、自分よりもずっと年下のテルタッテに浮かれてるといわれるとやはり落ち込みそうになる。

「あつ…………ほりつ始まるみたいだよ」  
「えつ」

そういうわれてステージの方を見れば、フェジーが一度舞台袖から出てくるところだった。

思わず息を呑む……

フェジーが天使の衣装を着て……とか考えていた自分がすく馬鹿らしく感じた。  
いやつあながち間違っているわけでもないが……

「わあ…………綺麗だね、衣装」

隣でテルタツテが感想を言つているが返す気にもなれない。  
白い衣装に身を包んだフェジーは何とも美しい剣を手にしていた。  
中央に立つと一度深く礼をして、スッとその青い瞳を細めたかと思つと踊りだす。

力強く…………どこか纖細なその舞に思わず見とれてしまった。

「す」「レ…………」

その一言しか出でこないほどに……

「フェジーさん…」

わたしは神塔の自分の部屋ヒロアトリに入ってしまったおひとすのフェジーを叫ぶようにして止めた。

走つてきたから少し息が荒い。

「そなた……どうかしたのか？」

振り返つたフェジーはわたしの訪問が意外だつたのだろう。少し驚いたような顔でこちらを見てきた。

「えと……あのっ、舞、すごかつたです。感動しました」

わたしは顔を息を整えて顔を上げると、とにかく思つたことを言う。

するとフェジーはますます驚いたような顔をしてじつちをみてきた。しかしそんなこと気にしているられない。

「動きとか、力強いのにどこか纖細で……動きも安定していましたし、すごく練習したんだろうなって思いました。本当に、すごくすばくよかったです」

言いたいことをいい終えたわたしは満足して一いつ口こと微笑む。

「…………そなたは、元の世界でのようなものに興味があつた

のか？」

「けらを見たまま瞬きを繰り返していたフェジーだがしばりくす  
るど、フツと思いついたようにそう言つた。

「興味……そうですね学生時代は演劇部でしたからそれなりには  
……裏方専門でしたけど」

「やうか……」

フェジーはそう言つと黙り込んでしまつた。  
不思議に思いながらもしばらく彼を見ているとチラリとその視線  
がこちらに向けられる。  
一瞬ドキリと胸が高鳴つた。

「褒められるとは……案外嬉しいものだな」

そう言つたフェジーの瞳がやんわりと細くなり、唇が弧を描く。

「ありがと」

フェジーのその笑顔に熱が頬に集まっていくのを感じる。  
こんな体験いつぶりだろ？

フェジーを見たまま動けなくなつていたその時、

「花音つー」

フツとそこには、今までいなかつた存在が割り込んできた。ローブをすっぽりと被り、赤と紫の瞳をもつたその少年。

「テルタツテ……」

呟くよう言えれば、彼はつかつかとわたしの前まで歩いてくる。

「僕を置いていくとか酷いよ」

ああ、フジィーに早く感想を言いたくてテルタツテを置いてきてしまつたのだつた……

「めんなさい」

「あいいけど……」

テルタツテは怒つているといつより呆れているといつ感じである。まあ、今回はわたしが悪い。なんとも年齢にそぐわない行動をしてしまつた。

「……ああそうだ。わたしの部屋に差し入れのお菓子がたくさんある。よかつたらそなたたち寄つていいくか?」

「……ぜひ」

そんなわたしたちをフォジーは穏やかな瞳で見つめていた。

## Merry X'mas? (後書き)

なんでもありのクリスマス特別編  
あとがきという名の言い訳

### フェジー＆テルタツ テ編

本当はフェジーとテルタツ テ分けて書いてたんですけど、テルタツ テはまだ登場して間もないのをちょっとネタバレになってしまい、無理やりフェジー編に割り込みさせました。

ですからこの話のメインはフェジー様です。

テーマはフェジー様を笑わせよう！です

テルタツ テがいたのであんな感じで終わりましたが、本来はもう少し甘めでした

急いで書いたのでこれまたグダグダで、しかも主人公のキャラが大分ズレてますね（汗）

何でもありますから許してください。

特別編はまだまだ続きます！  
ですが、更新は明日になると思われます。  
すいません

# Merry X'mas?? (前書き)

本編総無視

クリスマス特別編

一番キャラ崩壊してます

本編重視の方は見ないことをおススメ

Merry X-mas??

天子と王子。  
王子と天子。

この関係はどんなに切りたっても切り離せないものだ。  
たとえどんなに切りたくても……

「ほお、それはそれは天子の世界は随分と教育熱心だな」

無駄に長つたらしいテーブルの端と端に座るわたしと王子。

「そんなことありません。こちらの世界のように野蛮な戦闘がない分学問に力を入れているだけです」

「口ヤカに語る王子にわたしも精一杯の笑顔を返した。  
王子の頬が一瞬ピクリと動く。

「しかしそんなに学問ばかりしていては体がなまるのではないか  
？ああだから天子はたかが馬車に乗つたくらいで筋肉痛になつてしまつたのか」

今度はわたしの頬がピクリと動いた。

「生憎わたしの世界には馬車なんでもの『ございませんから。魔術なんてものよりももつとハイテクですばらしい技術のおかげでこの世界より数段すばらしい生活をしておりました」

「わきほども言っていた科学といふものか？人体の瞬間移動も出来ぬものがハイテクと考えるは……やはりそちらの世界は学問も劣つてゐるのでは？」

「だつたら王子様は方空の上に何があるかお知りですか？そもそもこの世界の形を知つてゐるんですか？地球は丸いんですよ？知つてますか？」

「地球とは何だ。空に上に消滅の世界と聞いている。行けばみな飲まれて消えてしまう」

「それ誰が言つたんですか？空の上に行けないからつて適當なこと言つただけですよ。つと/orかその理屈が間違つてているといった人間はいままで一人もいなかつたんですか？もしくはその事を証明しようと空の上に実際に行つた人間とか……ああそのための技術がないんですね、それじゃあ仕方がないか」

「お前の世界と一緒にするな。本当に消滅の世界であつたうどりするつもりだ？お前は人の命が簡単に消えても言ひとども？」

「そんなことは言つてませんよ。わたしはただつ」

「ねえレヴォラ」

いつまでもいい合いを続ける一人をテルタツテはあぐび交じりに見ている。

「何だ？」

「一体誰？聖夜祭の記念に天子と王子の食事会を提案したの？」

「王宮の老人たちと聞いているが？なんでも天子と王子の結婚を望んでいるとか……」

「あんなのが未来の王と戻だつたら僕この国出て行くよ」

テルタツテはそう言つてため息をついた。

## Merry X-mas?? (後書き)

なんでもありのクリスマス特別編  
あとがきといひの言い訳

王子様編

本当に「めんなさい」!!

忙しすぎて猛スピードで書いた小説  
書き直しするつもりがなかなか時間が出来ず……  
そのままです

いつか書き直します

時間があるときに……はい

## となる疑問（前書き）

- ・本編イメージを崩したくない方
- ・世界を壊す救世主をお読みでない方
- ・よく分けの分からぬ話が嫌い方
- ・その他いろいろ不快に思うところがある方

上記に当てはまる人は読まないようお願いします。

## とある疑問

青い月が空に昇る。

いつもと変わらぬ静かな夜のこと……

「ねえナナリ」

「なあにカノン？」

当たり前のように部屋のソファに腰掛けるナナリを見ながらわたしはすっと疑問に思っていたことを口にした。

「わたしとナナリの会話って外に聞こえてるんじゃないの？」

嫌だらうが何だらうがわたしは天子なわけで、この部屋の外にも見張りが一日中いる。

それなのにこんなに堂々と闇であるナナリと会話していくどうして気がつかれないのかと不思議に思っていたものの聞かずにはいるまま日々を過ごしていたのだ。

ナナリはわたしの疑問を聞き、何を今更といったような顔でこちらを見る。

「そんなの魔術でどうにかしているに決まっているでしょ？」「

「でもこの部屋には侵入者用の魔術があるってテルタッテが

……」

「それは実体がある者に足しての魔術だもの」

「実体？」

「そうよ」

ナナリはニヤリと微笑むとソファから立ち上がりふわりと浮かんだ。するとナナリの体が歪み黒い霧が宙を舞う。下半身が完全に霧となつたナナリは自慢げにわたしを見下ろした。

「どんなにはつきり見えていてもこのわたしは所詮偽者。本当の体はちゃんと闇の縄張りにあるわ。確かにこの部屋には魔術が施されているけど、魔術をかけたのは五大魔術師ではない一般の魔術師ね。このくらいの魔術なら私の魔力で誤魔化せる」

「一般的魔術師……わたしってやっぱり軽く見られてるのね」

「クスクス……そんなに自分を卑下にしないでちょうどいい?そんな連中をこれから見返すのが楽しんじゃないの」

霧になつていたナナリの下半身が元に戻り、彼女は再びソファに腰を下ろした。

「世界は変わる。貴方を崇め敬い、貴方なしでは生きられなくなる。そしてそんな連中を……ふふつ」

ナナリはそこまで言つて言葉を止めた。

言わなくとも分かるでしょう? とこうような顔でゆつたりとした笑顔を浮かべている。

そんなナナリからわたしはソッと視線を外した。

「…………もうすぐ夜明けね」

「あら、もうそんな時間?」

呟くよつと言えばナナリはふわりと窓の近くまで浮かび上がり窓の外を見た。

「本当ね、それじゃあ私はそろそろ失礼するわ

「ええ」

ナナリはこちらを見るといつものように妖美な笑みを浮かべる。

「それじゃあまたねカノン」

「またね、ナナリ」

次の瞬間ナナリの姿は黒い霧となり、まるで空気溶けるようこの消えていった。

静かになった部屋。わたしは氣になることがありチラリと入り口となる扉を見る。

少し躊躇したものの好奇心には勝てずわたしは口を開いた。

「……衛兵さん？」

「…………はい！なんでしょう？」

先ほどナナリと話していたときと大して変わらない大きさの声で、扉の外にいるはずの衛兵に呼びかけてみた。

「……なるほどね」

すぐに返ってきた返事にナナリの魔術のすばりしさを実感せざるえない。

「あの、天子様？」

「えつ、あつ！」「めんなさい」

わたしは見えるはずもない衛兵に向かつてとつとて笑顔を作った。

「えーと……今何時ですか？」

そんな時計を見れば分かるようなどうでもいい質問にきちんと答えてくれた衛兵に優しさを感じたのでした。

おじまー

## とある疑問（後書き）

世界を壊す救世主お気に入り登録900人突破記念  
私の小説を読んでくださっている皆様に心より感謝いたします。

## 発見しました（前書き）

本編総無視  
やや「メイティ

本編のイメージを壊したくない方は読まないとをおススメします。

## 発見しました

「そなたのその髪は地毛か？」

「……はい？」

突然の質問にわたしは首をかしげた。  
今日も威厳たっぷりのフュージーだがその瞳はどこか優しくて最初  
に恐怖を感じていたのが嘘のようだ。  
フュージーの存在はわたしがこの世界でわれやかな安息を感じじるこ  
とができる貴重な存在である。

「いえ……これは染めてあるので地毛ではありますな？」

わたしは自分のダークブラウンの髪を指で弄りながら答えた。  
最近根元の方が黒くなりかけていてするのが悩みである。

「染める？ そなたの世界では自分の髪を染めるのか？」

「はい。若い子だともっと明るい色にしてますよ」

わたしが当然のように云ひついで言えば、フュージーはびっくりしたよう  
な顔をした。

「神からの授かりものにそのよつなことをするとは……私には考  
えられん」

眉を潜めながら言つフュージーにはわたしは微かに笑みを零した。

「フェジーさんの髪は美しいですから染める必要なんてないですもんね」

「……そういう意味ではない」

フェジーがあんまりに難しい顔をするものだからわたしはもう一度笑つてしまつた。

そんなわたしを見ていたフェジーはフツと何かを思い出したような顔をする。

「そういうえば……前の天子は美しい黒髪だつた。そなたの髪も元は黒いのか？」

「ええ……そうですが」

黒髪……といふことは前の天子も日本人が、それに近いアジア人なのだらうか。  
いや、もしかしたら地球以外の世界からきた人間かもしれない。

黒髪というだけで断定は出来ないだろ。

そんなことを考えているとフェジーが思いもしないことを口にした。

「今の髪色も似合つてゐるが、そなたは黒髪も似合つそうだな」「…………え」

これを言つたのがもしセハンとかならお世辞だとわかり笑つて返せるのだが、フェジーだとそもそもいかない。

いつものような無表情のフェジーにわたしは戸惑いを隠せなかつた。

「え？ と……」

「どうかしたのか？」

自分の発言を気にした様子もなくそのまま聞いてくるフュージーにため息をつきたくなる。

「フュージーさん、わたし今分かりました」

「何だ？」

不思議そうな顔をするフュージーにわたしは一言。

「フュージーさんて、少し天然ですよね」

そう言つと「何を言つているのだ」と眉を潜めたフュージーさんを見て、わたしは小さく笑つた。

## 発見しました（後書き）

フジィーと花音の話を書いてほしい  
とのことで書いてみました。

微妙な雰囲気ですね  
上手に書けなくてごめんなさい

リクエストを下さったmisi様  
ありがとうございます

おこづかですか？（前書き）

本編総無視  
口メディです

本編のイメージを壊したくない方は読まないことをおススメします。

おじしゃですか？

「……えつと、今何て？」

「そなたはいくつなんだ？」と聞いたのだ

暖かな屋下がり。

廊下を歩いてこるとフジィーとセハンにさわったことに遭遇した。

「……フジィーさん、女性に年齢を聞くのは非常識ではないでしょうか？」

「それはそれなりの歳の者に対してだらうへ、そなたはまだ若い」

一体どこの口がそんなことをいつのやう。

わたしが若い？

「お嬢さんは17、18くらいかな？」

「その歳にしては少々度胸が強すぎる氣もするが……」

「いや、子供の方が怖いもの知らずで……」

「なるほど」

17、18？

そりゃ日本人は幼く見られることが多いが、たゞがにそれはないんじやないだろうか。

「おー人とも、お世辞はいづませんので」

思わずかうづつと、フジィーとセハンは顔を見合させて次の瞬間

セハンは恐る恐るとこりでこちらを見た。

「お嬢さん……何歳なの？」

その言葉に顔が引きつる。

「まあ、花の10代ではありますよ」

一人は少しの間固まつて

「天子、嘘はよくない」

「お嬢さん、さすがにそれは冗談キツイかな」

真剣な顔でそういうのだから困った。

嘘言つてびりますか。

そういえば、年齢よりも下の扱いを受けることが多かったなどわ  
たしは今までの生活を思い出す。

わたしため息をついた後一人に向かつておいでおいでと手を動か  
した。  
そして一人の耳元に口をやつ……

一人が驚愕に目を見開いたのはその少し後。

「

だが、わたしの年齢がその後他の人に知れ渡ることはなかつた。  
フェジーもセハンも誰にも言わなかつたらしい。

そのため、わたしが年齢よりも随分と幼く見られていることは変わ  
ず……  
それを嬉しいと思うべきなのか、悲しいと思うべきなのかわたし  
は複雑な気持ちになつた。

おしまい

おいくつですか？（後書き）

お遊びで書いた話。

花音の実際の年齢は、想像にお任せします

## 赤ずきん（前書き）

### 本編総無視

本編のイメージを崩したくない方は読まないことをおススメします。  
童話の赤ずきんを元にして書いております。

## 赤ずきん

昔々あるとこひこ、テルタッテといつそればそれは可愛らしき女の子がおりました。  
テルタッテは人々から赤ずきんと呼ばれていてそれはそれは可愛がられておりました。

「……まず最初つから間違つてゐるよな。僕女の子じゃないし」「テルタッテ、細かいことは気にしてはいけないって台本に書いてあるから」「まあね……てか花音まだ出番じやないでしょ?」「誰のために出てきたと思つてゐるの……」

ある日、赤ずきんのお母さんは赤ずきんにお使いを頼みました。

「…………殿下?」「何だ魔術師」「…………殿下の威厳もその格好だと半減するね」「…………ちょっと地獄まで行つて舌でも抜かれて来い」「殿下、おやんと台本の台詞言わないこと……」

お母さんは赤ずきんに籠を渡すといつ語いました。

「…………」の籠の中にはお菓子が一つとぶどう酒一瓶入っています。これを森の奥のおばあさんの家に持つて行きなさい。おばあさんは病氣で弱っているが「口をあげればきっと元気になるでしょう。外へでたらお行儀よくして、寄り道などしてはいけませんよ」「見事な棒読み……」

「いいからやつやと行け。これは命令だ」

笑顔で手を振るお母さんに見送られながら、赤ずきんはルンルンとスキップしてお使いに出かけました。

「殿下もう帰っちゃったし、僕もスキップなんてしてないんだけど……」「

森の中に入ると狼がひょっこり出でました。

「やあ、こりにちは赤ずきんちゃん」

「…………似合つねえセハン」

「テルタッテ、君もなかなかその赤ずきんが似合つているよ」

「…………」

「せっかく褒めているのに……」

「嬉しくないよ。ってかセハンの存在覚えている人いるのかな？」

本編じゃもう空気なみにっ

「さて、続きをはじめようか？ 赤ずきんちゃん」

「ちなみにセハンは本編の最初の方に出てきた医者だよ。ひょこちゅこ出演してるけどみんな覚えてる？」

「赤ずきんちゃん？」

「はいはい続きね」

狼は赤ずきんに尋ねました。

「こんな早い時間からどこに行くんかい？」

「おばあさんの家に行くんだ」

「その籠はなんだい？」

「お菓子とぶどう酒だよ。ねえもう行つていい？ 早く終わらせて

「帰りたい……」

「駄目だよテルタツテ。ほら、まだ台本に台詞残つているだろ  
う？」

赤ずきんは狼の質問にこっやかに答え続けました。

「おばあさんのお家はどこにあるんだい？」

「森の奥の、大きな樅の木が三本立つてある下の家」

「おばあさんの家に何をしに行くんだい？」

「……おみまいだよ。おばあさんは病気なんだ。でもこれをおげ  
ればきっと元気になる」

赤ずきんはそう言って嬉しそうに籠を掲げて見せました。  
そんな赤ずきんの様子を見ながら狼はこいつ考えました。

「若くて柔らかそうな娘だね。とっても美味しそうだ。おばあさ  
んとこの娘、両方美味しく食べてあげよう」

「思いつきり声に出でるし……なんかセハンが言つと別の意味に  
聞こえてくる……」

「おやつ、赤ずきんちゃんは随分と大人びてるね」

「……僕をなんだと思つてるのさ」

「ククク、君が本当に若い娘だつたらよかつたんだけどなあ……」

「……ナレーター続きはじめちゃつて」

狼はしばらくの間赤ずきんと並んで歩き、どうやら食べようか  
考えていました。

そしてフツと道端に咲いている花を見て、良い案を思いついた  
のでした。狼は不適に微笑むと赤ずきんを誘惑するような声で言い  
ました。

「ほら赤ずきん。森を良く見て」「うらん？綺麗な花がたくさん咲いているよ？小鳥が楽しそうに歌つてるよ？まだ朝早い。時間はたっぷりあるんだからもつと楽しみながら歩いて」「うらんよ」

「嫌だ。早く行つて早く帰りたい」

「『ウラカラ、ちゃんと台本見て』

「……仕方がないなあ」

狼の言葉に赤ずきんは、そつと辺りを見回してみました。するとお日様の光が木と木の間から優しく降り注ぎ、たくさんの花が咲き誇っているのが見えました。小鳥は美しい歌を歌っています。赤ずきんはその美しい光景に、思わず足を止めました。

「なんて美しいお花なんだろ？……。おばあさんに持つていつてあげたらきっと喜ぶだろうな」

「元気で良いにおいのする花を摘んで持つていつてあげるといよい。大丈夫時間はたつぱりあるからね」

赤ずきん狼の誘惑の言葉に負けて花を摘み始めました。

しかし一つの花を摘むと、この奥にはもっと美しい花が咲いているのではないかと思って赤ずきんは森の横道へとどんどん入つてしまふのでした。

「……ねえ魔術で飛んじゃ駄目？」

「駄目」

そんな赤ずきんの様子をしめしめと見ていた狼は、赤ずきんが花を摘むのに夢中になつていいひにおばあさんの家に先回りしました。

大きな楠の木の下の家を見つめると、ニヤリと微笑みその扉をと

んとんとん、ヒノックします。

「どちら様ですか?」

「おばあさん、赤ずきんだよ。お見舞いのお菓子とぶどう酒を持ってきたんだ。開けてくれるかな?」

「声が明らかに、成人男性なんですけど……」

「ん? 何おばあさん?。病氣で弱つていてドアが開けられないの? 大丈夫だよ僕が開けるから」

「えつ! ちよ、何を勝手に言つてるんですか!」

狼は取つ手を持つと勢い良く扉を引きました。

扉はバキッという音を立てながら開き、部屋の中にはベットに横になつたおばあさんがおりました。

「その扉、引くんじゃなくて押すんですけど……」

「細かいことは気にしてはいけないよ、お嬢さん。おばあさんの衣装似合つているね。弱つてている君もなかなか可愛いよ」

「セハーンさん、本編よりもチャラくなつてしませんか? そんな台詞台本には……」

「台本通りにしてほし! の? 仕方ないなあ。じゃあ台本の通りに……」

狼は案外若かったおばあさんのベットに近づくと拍鼓をしました。ペロリと自分の唇を舐めると、恐怖で動けなくなつたおばあさんに妖美な笑みを見せ……

「いただきます」

「台本通りだけど何か違う気が! ……って、ちよ、いやああああああああ」

そのころ赤ずきんは、花を集めること夢中になつて森を駆け回つておりました。集めるだけ集めてもう持ちきれなくなつたとき、赤ずきんは本当の目的を思い出しました。

慌てて元来た道に戻ると、おばあさんの家に走り出しました。

「何で魔術駄目なの？走るとか面倒なんだけど……」

おばあさんの家まで来てみると、戸が開いたままになつてあります。赤ずきんは不思議に思いながら扉に近づいてこいつ言いました。

「おばあさん、いるの？」

すると、ベットのある方向からそれはそれは大きな金属音が……

「金属音つって……え？」

おばあさんのベットの上では狼と一匹の狛犬が剣を交えて戦つておりました。おばあさんはその光景を畳然とした表情で見つめて、その隣では狩人が呆れた表情を見せていました。

「もう滅茶苦茶だね……といつか犬……」

「テル！お前遅いぞ」

「いやつ、だつて台本に書いてあるから……といつかレヴォラ、狛犬の出番まだでしょ？」

「誰にせいだ！」

「セハソ、お前は少々やりすぎだ」

「フェジー様まで……僕は台本通りにおばあさんを食べよつと」

「どこが台本通りだ……花音殿お怪我はありませんか？」

「あつはい、大丈夫ですけど……」

「全く……もう良い。テルタツテ、さっさと見舞いの品を渡せ」

「はーい」

そんなこんなで、狩人と獵犬の活躍により狼は撃退され、赤ずきんは無事おばあさんにお見舞いの品を渡すことが出来ました。

赤ずきんが摘んできた花は窓際の花瓶に綺麗に飾られています。

赤ずきんは知らない人に声をかけられても無視をしなくてはいけないということ、寄り道はしてはいけないということを学びました。

めでたしめでたし

## 赤ずきん（後書き）

お気に入り登録1000人突破しました！  
これもすべて皆様のおかげです。  
本当にありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6711p/>

世界を壊す救世主 番外編

2011年8月14日16時52分発行